

「内科医の薬 100 — Minimum Requirement」

東京都済生会中央病院内科部長	北原 光夫	編集
東海大学大磯病院内科講師	上野 文昭	
東京都済生会中央病院内科部長	北原 光夫	執筆
湘南鎌倉病院内科部長	相澤 信行	
湘南鎌倉病院循環器科医長	金 國鐘	
茅ヶ崎徳洲会総合病院呼吸器科医長	渡 雅文	
東海大学大磯病院内科講師	上野 文昭	
東京都済生会中央病院内科医長	高木 誠	
東京都済生会中央病院内分泌代謝科	久保 明	
東京電力病院内科科長	高野 愼	
昭和大学医学部精神科講師	宮岡 等	

東海大学医学部教授・教育計画室

大 塚 洋 久

一般的な内科診療で頻繁に参照される医書は、おそらく薬剤に関するマニュアルである。大病院で専門領域の患者中心の診療を行う医師も、専門外の合併症に簡単な治療を施す機会は多い。ふだんは使わない薬剤の常用量や禁忌を調べるため、薬品集は臨床現場の必需品である。不便なことに薬品集は、処方すべき薬剤名を思いつかないときの助けにはならない。適切な薬剤が思い浮かばないために、無用の他科依頼を出し、診療の能率を低下させることは望ましくない。

以上の見地からすると、本書の着想は適切なものと思う。種類は限られているが、日常診療の相当範囲をカバーするに足る薬剤が収録され

ている。特筆に値するのは索引である。わかりやすい目次と二重の索引によって、薬剤名と疾患・病態の両面から検索できるようにしてある。安易な対症療法に陥らぬよう心して用いる限り、真に有用な内科診療のツールである。

取り上げる薬剤の種類を 100 とされたことは興味深い。私自身の経験では、頻繁に使う薬剤が 20 種類程度、ときどき使うものまで含めて 50 種類にはならないと思う。その大部分は本書に収録されていた(目次には必ずしも入っていない)。内科医の投薬内容は、常用する検査項目と異なり、驚くほど専門領域による差が少ないらしい。そのような共通領域を巧みにピックアップされた

ことに敬意を表したい。

本書の冒頭に“役に立つ知識はいほどよいとは言えない”とあるのは、医学教育の立案に携わる者からみて至言である。医学の知識体系は急激な膨張を続けており、現在の“多少とも役に立ちそうなことはすべて教える”方針が破綻するのは明白である。本書は情報の取捨選択の方法についての 1 つの提言であり、マニュアルの利用はもちろん、臨床知識のまとめに有用であり、多くの臨床医や医学部高学年の学生にお勧めできる。

● B6 240 頁 図 3 1993 定価
3,605 円(税込) 円 400

医学書院 刊 (☎ 03-3817-5657)